

学位論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 号		
所属	保健学専攻 生涯保健学分野 老年保健学領域	氏名	長谷川 文
学位論文題目	Development of the Japanese version of the Westmead Home Safety Assessment for the elderly in Japan (日本の高齢者における Westmead Home Safety Assessment 日本語版の開発)		
論文審査担当者	主査 小林正義 副査 務台 均, 上村智子		
<p>(学位論文審査の結果の要旨)</p> <p>本研究は、日本の高齢者の転倒リスクを評価するツールの開発に向けて、海外で信頼性が検証されている Westmead Home Safety Assessment の日本語版 (WeHSA-J) を開発し、検者間信頼性と内容妥当性を検討したものである。</p> <p>検者間信頼性は、WeHSA-J 検者養成研修を修了した作業療法士が検者となり、50 名の高齢者が被験者 (78.2±7.1 歳, 女性 21 名) となり実施された。被験者の担当作業療法士と WeHSA-J の開発者が同時に自宅訪問し、独自に WeHSA-J を使った転倒リスク評価を行い、結果の信頼性を Cohen の κ 係数を求めて評価した。内容妥当性については、臨床経験 10 年以上の作業療法士 18 名が WeHSA-J の各項目について、日本の高齢者の自宅の転倒ハザードの同定項目として適切かどうかを 4 件法で評価した。</p> <p>WeHSA-J で転倒ハザードが多かったのは、屋内の階段/段差, シーティング, 浴室, 浴槽, 屋外の階段/段差, トイレの場所, 履物, 屋内の階段/段差の手すり, フロアマット, 敷地内の歩道と車の進入路等で、WeHSA-J 全 71 項目のうち、中等度以上で検者間信頼性が得られ、良好な内容妥当性を認めた 49 項目 (69%) を抽出した。これらの項目は、日本における高齢者の転倒事故発生場所や基本的日常生活動作 (BADL) を広範に含んでおり、日本の高齢者の住まいの安全性を評価する項目として適切と考えられた。また、海外データとの比較により、日本では屋内段差や浴槽での転倒ハザードが特異的に高いことが明らかとなり、さらに、WeHSA-J による評価では、検者間信頼性を高めるための検者養成研修の必要性が示唆された。</p> <p>わが国では、転倒による外傷は高齢者が要介護状態になる主たる原因であることから、有効な転倒予防策が求められている。住まいの安全評価は、高齢者の転倒予防に向けた有効な介入手段となり得るが、現在、日本では対象者の転倒ハザードを評価する標準化されたツールはない。本研究によって、転倒リスクのある日本の高齢者の住まいの安全性を評価するのに適した項目が選定され、良好な検者間信頼性を得るための検者養成研修の重要性が明らかとなった。これらの知見は、転倒予防策としての住まいへの介入を構造化し、有用性を検証するための基盤整備につながる。今後、日本の家屋構造と高齢者の転倒リスクを考慮した評価項目を追加することにより、さらに信頼性と妥当性の高い評価ツールの完成が期待できる研究である。</p> <p>以上の評価から、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			